

## 「涙が喜びに変わる時—喜びと希望をもたらした主イエスの復活と昇天—」

2020. 4. 12 南与力町教会イースター礼拝

### 序：愛する者を失う悲しみ

本日は主イエスの復活をお祝いするイースター礼拝をささげています。しかし、この会堂には牧師と長老しかおりません。この高知でもコロナウイルスの感染が広がっているため、このようにせざるを得ませんでした。

そもそもキリスト者が日曜日に集まり、礼拝をささげるようになったのは、主イエスが「週の初めの日」、すなわち日曜日に復活なさったからです。それゆえ、ユダヤ教では土曜日が安息日だったにも関わらず、キリスト教会は日曜日を「主の日」と呼んで、その日に集まり、礼拝をささげるようになったのです（使徒 20:7）。その主の復活を祝うイースターに教会に集まれない、顔と顔を合わせて礼拝し、お祝いできないということはとても残念なことです。

しかし今の状況を考えるならば仕方のないことだと思います。高知県知事から不要不急の外出自粛要請、イベント・集会の自粛要請が出されました。教会の礼拝は単なるイベントではありませんが、今の状況においては、何よりも「命を守る」ことを優先させなければなりません。コロナウイルスによる感染症は、軽症や無症状の人が多い一方、確実にある割合の人は亡くなってしまう、命を落としてしまう恐ろしい病です。私たちは今、自分と隣人の命を守るための行動を取らなければなりません。それは「殺してはならない」という神様の戒め、そして「隣人を自分のように愛しなさい」という愛の戒めに従うことでもあるはずで

す。コロナウイルスによって多くの方が亡くなっています。世界での死者は10万7千人を超えたということです。私たちはこのような数字を聞いて、大変なことが起こっている、ということは認識するでしょう。しかし数字を聞いただけでは実感が湧かない、というのも正直なところではないでしょうか。その一方で、私たちは自分にとって親しい人が亡くなった、ということになると大きなショック、悲しみを覚えるのではないかと思います。お笑い芸人の「志村けんさん」がコロナにかかって、亡くなったという知らせは、私を含め、多くの人に衝撃と悲しみをもたらしました。ご家族にとってはなおさらでしょう。志村けんさんのお兄さんがインタビューに答えておられました。けんさんがコロナにかかっているとわかり、入院してからは一度も会うことはできなかった。最期を看取することもできなかった。遺体と会うことも許されなかった。亡くなってそのまま火葬場に運ばれ、遺骨を拾うことも許されなかった、ということです。そのことを涙ながらに語っておられました。愛する家族と最後の別れをすることができない。そのご遺体を見ることも、丁寧に葬ることさえ許されない。これは耐えがたい苦しみ、悲しみではないかと思います。そして世界では多くの方がそのような悲しみを味わっているのです。

### I. マグダラのマリアの悲しみと涙—墓から取り去れた主

今日の箇所に出てくる「マグダラのマリア」も愛する主を失って深い悲しみにありました。「マグダラ」というのはガリラヤ湖の西岸にある町の名前です。その町の出身だったため「マグダラのマリア」と呼ばれていたのです。ルカ福音書8章2節によると彼女はイエスによって「七つの悪霊を追い出していただいた」と言われています。「七つの悪霊」という程ですから、彼女は以前本当にひどい状態にあ

ったのだと思います。人間には手の施しようのない状態、あるいはそれほど重い病にかかっていたのです。しかし主イエスによってそこから癒された、救われたのです。その彼女は多くの婦人たちと共に、主イエスとその一行に奉仕していました。自分の持ち物を出し合って、彼らの福音宣教の旅を支えていたのです。彼女は当然、自分を救ってくれた主イエスに感謝と敬愛の念を抱いていたと思います。その思いから主イエスとその一行に仕えていたのです。しかしその主イエスがエルサレムにおいて十字架につけられ、死んでしまいました。このマグダラのマリアも十字架のそばに立って、そのイエスの姿を見ていました（ヨハネ 19:25）。そして主イエスの遺体が墓に葬られる様子も見ていたと思います（ルカ 23:55）。主イエスは十字架上で亡くなったのは金曜日、その次の日は安息日でしたから休まねばなりませんでした。そして安息日が明けた「週の初めの日」の朝早く、まだ暗いうちに、彼女は墓に行きました。他の福音書はマグダラのマリアだけでなく、幾人かの婦人たちも一緒に墓に行ったことが記されています。ヨハネ福音書でも 20 章 2 節のマリアの言葉は「主が墓から取り去られました。どこに置かれているのか、わたしたちには分かりません。」となっています。この「わたしたちには分かりません」という言葉から他にも婦人たちがいたことが暗示されています。しかしこの福音書を記したヨハネは、その中の「マグダラのマリア」にだけスポットを当てて描いているのです。何のために彼女は墓に行ったのでしょうか。他の福音書を見ますと、それはイエスの遺体に香料、香油を塗るためであったことがわかります。香料を塗って亜麻布に包んで葬るのが、当時のユダヤ人たちの習慣でした（19:40）。しかし、主イエスが十字架にかけられた金曜日は、日没から安息日が始まったので、マリアはそのような埋葬に参加することができなかったのです。それで既に墓に葬られた後ではあるが、主イエスの遺体に自分も香料を塗ってさしあげたいと願い、彼女は日曜日の朝早くに墓を訪れたのでした。

しかし思いもよらぬことが起こります。彼女は墓から石が取りのけられているのを見るのです。彼女はペトロと「イエスが愛しておられたもう一人の弟子」、すなわちヨハネのところに走っていき、告げました。「主が墓から取り去られました。どこに置かれているのか、わたしたちには分かりません。」

彼女としてはパニック状態だったでしょう。とりあえず弟子たちに告げなければ、と思ったのです。それを聞いたペトロとヨハネと一緒に墓へと走って行きました。そして二人は主イエスの体を包んでいた亜麻布と、頭を包んでいた覆いが丸めて置かれているのを確認しました。普通、誰かが主イエスの遺体を盗んでいったならば、わざわざ亜麻布や頭の覆いを取って、しかもそれを丸めて置いていくのでしょうか。そんなことはしないはずです。それで 8 節では「それから、先に墓に着いたもう一人の弟子も入って来て、見て、信じた」と言われています。「信じた」とは主イエスが復活されたことを信じた、ということです。一方、続く 9 節でこう言われています。

「イエスは必ず死者の中から復活されることになっているという聖書の言葉を、二人はまだ理解していなかったのである。」

ペトロもヨハネも主イエスが必ず死者の中から復活することになっている、と聖書に書かれていることをこの時はまだ理解していませんでした。だからこの時、ヨハネは墓の置かれていた亜麻布と顔の多いという証拠、しるしを見て、初めて主イエスの復活を信じた、ということでしょう。

しかし、それで喜びにあふれる、ということはありませんでした。まだその程度の信仰だったのかも知れません。ヨハネも主イエスの復活を信じ始めたに過ぎなかったのです。二人はそれぞれ家に帰って行きました。

## Ⅱ. マリアとイエスとの再会——その名を呼ばれて

一方、マリアはというと 11 節。

「マリアは墓の外に立って泣いていた。」

マリアはまた墓に戻ってきていました。弟子たちが帰ってしまった後も、墓の前で泣き続けていたのです。自分の愛する主が、そのご遺体が何者かに取り去られてしまった。もう主を見ることも、触れることも、香油を塗ってさしあげることもできない。そのことが悲しくて、寂しくて泣き続けていたのです。そのように泣きながら彼女は墓の中を覗き込みました。もう一度、自分の目で確認しようと思ったのでしょう。すると 12 節

「イエスの遺体の置いてあった所に、白い衣を着た二人の天使が見えた。一人は頭の方に、もう一人は足の方に座っていた。」

それを見たマリアは驚いたことでしょう。しかし彼女が言葉を発する前に、天使たちが彼女に言いました。

「婦人よ、なぜ泣いているのか」

彼女は答えます。

「わたしの主が取り去られました。どこに置かれているのか、わたしには分かりません。」

「わたしの主」が何者かによって取り去られてしまった。どこかに行ってしまった。それがこの時の彼女の悲しみと涙の理由でした。

そのように答えている最中に、彼女は後ろに気配を感じたのでしょう。後ろを振り向きました。そしてあのイエスが立っているのを見ました。しかし、彼女はそれがイエスであるとは分からなかったのです。これは不思議に思えます。それほど愛し、慕っていたイエスのことがなぜわからなかったのでしょうか。涙で目が霞んでいたのかもしれませんが。しかしそれ以上に、主イエスの遺体を捜していた彼女にとって、主イエスが生きて立っているなどとは思っても及ばなかったのでしょうか。イエスは彼女に言います。

「婦人よ、なぜ泣いているのか。だれを捜しているのか。」

「婦人よ、なぜ泣いているのか。」これは天使がかけた言葉と同じです。「あなたは泣いているが、なぜ泣いているのか。泣く理由はもうないではないか」。そのようなニュアンスが背後にあるでしょう。またイエスは「だれを捜しているのか。」とも言われました。「あなたが捜しているのはこのわたしではないか」そのことに気づかせようとしておられるようです。

しかしマリアは気づきません。彼女はそれが園丁（園の番人）だと思って答えます。

「あなたがあの方を運び去ったのでしたら、どこに置いたのか教えてください。わたしが、あの方を引き取ります。」

マリアは主イエスの遺体を捜し続け、何とか自分のもとに引き取ろうとするのです。イエスは彼女に言いました。

「マリア」

この言葉は原文を見ますと主イエスが当時話しておられたアラム語の表記で「マリアム」と記されています。主イエスはこれまで何度となく呼んだのと同じように彼女に呼びかけたのです。「マリアム」と。

そしてするとマリアはもう一度振り向きます。先ほど既に振り向いていましたが、また墓の方に顔向けていたのでしょう。再び振り向いた彼女は言いました。

「ラボニ」と。

これはヘブライ語、正確にはアラム語に「先生」という意味です。厳密に言うと「私の先生、わが師よ」という親愛の込めた言い方です。イエスを見ても、その声を聞いてもマリアはイエスだと気づかなかったのですが、「マリアム」という自分の名を呼ぶその声を、かつて何度も聞いたその響きを耳にして、彼女は気づいたのです。そして「ラボニ」、私の先生、と答えたのでした。

主イエスはかつて次のように語っておられました。ヨハネ福音書 10 章 3 節～4 節

「門番は羊飼いは門を開き、羊はその声を聞き分ける。羊飼いは自分の羊の名を呼んで連れ出す。自分の羊をすべて連れ出すと、先頭に立って行く。羊はその声を知っているの、ついて行く。」

主イエスはご自分の羊の名前を呼んでくださる羊飼いです。そしてマリアはその自分の名前を呼ぶ、羊飼いの声を聞き分けたのです。

復活の主イエスは今、私たちの目には見えません。主イエスが側にいてくださっているのに気がつかない、それが分からない、ということが私たちにもあるのです。しかし私たちの羊飼いである主イエスは私たち一人一人の名を、羊一匹一匹の名を知ってくださっています。そして優しく、愛を込めてその名前を呼んでくださるのです。私たちもその声を聞き分けて、主イエスだと分かり、答えます。「ラボニ、わが先生、わが主よ」と。こうして私たちは今も復活された主イエスの御声を聞き、喜んで主に応え、礼拝するのです。

### Ⅲ. 弟子たちへの喜びの知らせ——私たちのための主イエスの昇天

しかし、この時、主イエスはマリアに言いました。17 節

「わたしにすがりつくのはよしなさい。まだ父のもとへ上っていないのだから。」

この時、マリアは主イエスの足にすがりついていたのだと思います（マタイ 28:9）。ずっと探し続けていた「わたしの主」が目の中にいる。しかも生きた状態で。マリアは本当に喜び、主イエスの足にしがみついたのではないのでしょうか。「もう離さない。どこにも行ってほしくない」という気持ちで。

しかし主イエスはそのマリアに「わたしにすがりつくのはよしなさい。ずっとすがりついてはならない」とおっしゃいました。そしてその理由として「まだ父のもとへ上っていないのだから」と。復活した主イエスは、このままずっとマリアの側にいるわけではなかったのです。「父もとに上る」必要があった。まだそれが完了していない。だから「わたしにしがみつきの続けていていけない」と言われました。

さらにこう言われたのです。

「わたしの兄弟たちのところへ行って、こう言いなさい。『わたしの父であり、あなたがたの父である方、また、わたしの神であり、あなたがたの神である方のところへわたしは上る』と。」

この弟子たちへの知らせはヨハネ福音書に独特のものです。他の共観福音書において弟子たちに伝えるべきこととは、イエスが復活なされたこと、そしてガリラヤで再び会うことができる、といった内容

です（マルコ 16:6-7）。しかし、このヨハネ福音書では、復活というよりむしろ、「昇天」、主イエスが天に、父なる神様のもとに上られることが、その内容になっています。それはなぜなのでしょう。ヨハネ福音書においては何度も主イエスが弟子たちに「わたしは父のもとへ行く」（14:11）ということを用意を予告なさっていました。そしてこの 20 章 17 節で「わたしは上る」と訳されている言葉は、原文を見ますと、未来形ではなく、現在形です。すなわち、「わたしはすでに上りつつある、父のもとに上っている途上である」というニュアンスが読み取れます。ヨハネにおいては、復活と昇天とは一体的なものなのです。復活された主イエスはすでに父なる神様のもとへ上る途上にあるのです。

しかもここではただ「父のもとに上る」とおっしゃってはいません。そうではなく、『わたしの父であり、あなたがたの父でもある方、また、わたしの神であり、あなたがたの神でもある方のところへわたしは上る』とおっしゃっているのです。そして主イエスは弟子たちのことを「わたしの兄弟たち」と呼んでおられます。主イエスがこのように弟子たちを呼ばれるのはここが初めてです。

主イエスを信じる弟子たちは既に、主イエスの兄弟、すなわち同じ父なる神を持つ兄弟、神の家族とされているということです。それゆえイエスの父が、あなた方の父、イエスの神が、あなたがたの神である、と言われているのです。

復活した主イエスは天に上っていかれました。しかし、それは私たちとは関係のない遠い場所に去って行ってしまった、ということではないのです。主イエスはヨハネ福音書 14 章 1 節～3 節で語っておられました。

「心を騒がせるな。神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい。わたしの父の家には住む所がたくさんある。もしなければ、あなたがたのために場所を用意しに行くと言ったであろうか。行ってあなたがたのために場所を用意したら、戻って来て、あなたがたをわたしののもとに迎える。こうして、わたしのいる所に、あなたがたもいることになる。」

主イエスが父なる神のもとに上られたのは、わたしたちのための場所を用意しに行くためでした。そして主イエスは再び戻って来て、私たちをそこへと、天の父なる神のみもとへと迎え入れてくださるのです。そうして主イエスのいる所に、私たちもいることになります。

復活された主イエスは私たちに聖霊を送り、その聖霊において今もわたしたち一人一人と共にいてくださっています。そしてやがて私たちを父なる神様のもとに迎え入れてくださいます。主イエスが復活し、天に昇られたのはその保証なのです。

#### 結論：

確かに死は今も私たちに深い悲しみをもたらします。しかし、主イエスと復活と昇天によって、わたしたちには決して奪われることのない喜びと希望が与えられているのです。